

文部省選定

負けたな! 千太

—さよならじめ虫—

誰の心の中にもじめ虫がいる。
ドジラシ「亞麻色の髪の乙女」の調べにさせて、
素直心でじめを考える、ある夏の物語。



アニメーション映画
16%・24分
¥230,000
VHS
¥50,000

著作・製作
アニメーション画房 わ組
JHV

—さよならいじめ虫—

負けるな！

千太

誰の心の中にも、いじめ虫がいる。

人間も他の生き物と同じように、残酷な心、攻撃する心を持っています。誰の心の中にもいじめ虫がいるのです。今、ひとりひとりが自分のいじめ虫と向き合い、どう付き合っていくかが問われています。この物語は、弱いものへの慈しみや命の尊さを基本に、誰の心にもいじめ虫がいること、いじめという行為がいかに醜く、無益であるかを、アニメーションの特性をフルに活用し描いていきます。この物語をどう捉えるかはまったくの自由です。百人の子供達が観れば、百通りの捉え方があるでしょう。様々な意見、反発、自分自身との葛藤があるはずです。また、心の壁から這い出してくる、それまで気づかなかつた気持ちや本音に驚くかもしれません。この素材がいじめという難しい問題について皆で語り合う、ひとつのきっかけとなってくれることを願ってやみません。

命とは？人間とは？いじめとは？この映画は、ひとりひとりの心に直接この問いかけを試みる、ある夏の物語です。

※ あらすじ ※

物語は、蝶子という少女を通して語られてゆきます。ある日、同じクラスの身体の弱い女の子が、いじめグループのターゲットになります。クラスメートは、離し立てるグループ、無視を決め込むグループに分かれ女の子は孤立します。しばらくして、同じクラスの昆虫好きの少年千太がこのいじめを先生に告げ口したという噂が広がり、矛先は千太へ。千太はその噂の真相については一言もしゃべらず、心も口も閉ざしてしまいます。それから、千太への限り無いいじめが始まります。蝶子は、この時の様子をこう語ります。「それからというもの、私たちの中のいじめ虫は、蜂のように刺し、蠅のように付きまとい、蠍のようににかかりました。」

映像は、生徒たちが恐ろしい虫たちに変態し、千太の心をぼろぼろにしてゆく様子を象徴化して捉えます。

ある日の帰り路、千太は道端で弱った蟬に出会います。千太は、蟬の弱った身体を癒すために家に持ち帰り、本格的な夏を待ちます。数日後、千太は夏休みを迎え、蟬にこう呟きます。「夏だよ。ほんものの夏が来たよ」千太は、元気になった蟬を公園で放ち、フルートを奏でる女性響子に会います。その音色は、千太のぼろぼろに傷付いた心を洗い、心の疲れを癒してゆきます。過去にいじめを受けた経験のある響子は、千太にこう語りかけます。「好きなことをうんとするといいよ。きっと、気持ちがくたびれちゃってるからね。栄養をあげるの。でもね、無理しちゃダメよ。少しずつ、少しづつね」千太の心が少しづつ回復してゆきます。大好きなファーブル昆虫記を読むために図書館に通い、毎朝、公園の池の回りを走るようになります。図書館では、学区の違う勉という友だちができ、朝のジョギングでは関西から遊びに来ているきたると友だちになります。やがて、響子を交えた四人は、蟬の合唱を聞く仲間になります。そこに偶然の出会いから蝶子が加わります。蝶子にとって響子は、フルートを教わる先生でした。この時の心境を蝶子はこう語っています。「その時、私の気持ちは複雑でした。何が後ろめたいような、逃げ出したいような……」すべてのわだかまりを搔き消すかのように、命の力にあふれて蟬の声が響きます。五人は、蟬の世界を語りあいながら、命の尊さを実感します。

千太は語ります。「たくさんさんの蟬が鳴いているように思えるけど、ああ

やって大人になれる蟬は本当に少しなんだ」そして、蝶子もこう続けます。「脱皮できずに、鳴くことをしらずに死んでしまった幼虫たち。歌いたくても歌えない、鳴きたくても鳴けない蟬たちのことを考えると、今生きているということ、命というものがとても大切に思えるようになりました。」

登校日、千太の席にいじめグループがやって来ます。そして、自分たちが殺した無数の蟬の死骸を千太の机の上に広げます。止めに入った蝶子も突き飛ばされてしまいます。千太はついに逆上し、天を仰ぎながら悲鳴に似た凄まじい叫び声をあげます。

「ぎやあああああまあまえたちに鳴けない蟬の悲しさがわかるかあああ」その時の様子を蝶子はこう語ります。「その時、この地上にいるすべての蟬たちが、いつせいに鳴いたような気がしました……」千太の叫びは、まさに弱き生物たち、声なき者たちの怒りの悲鳴でした。いじめグループは恐怖に恐れあのきます。やがてその恐怖も千太の激しい怒りも同じ深い悲しみに変わっていきます。どうして、こんなことになってしまったのか。どうしたらこんなことをおしまいにできるのか。蝶子は心の底からおもいます。「このままではいけない。このままにしてはいけない。脱皮できない幼虫は死んでしまうのだ。みんなの心が死んでしまう。にんげんの心が死んでしまう」蝶子は担任の先生に相談し、夏休みの一日前を使ってホームルームを開きます。おもいつきり話をするために。

このホームルームの時、千太はこんな作文を読みます。「誰の心の中にもいじめ虫がいる。ぼくの心にもいる。きみの心にもいる。いじめは、誰も得をしないよ。いじめる人もいじめられる人も、みんなぼろぼろになるからね。まるで害虫にやられた葉っぱみたいだよ」…………

夏休みも終わりに近づき、きたると関西に帰る日が来ました。千太、蝶子、勉、響子は、駅のホームできたると別れを惜しみながら、来年の再会を約束します。過ぎ去つてゆく新幹線に向かって、四人は大きく手を振ります。蝶子は最後に語ります。「こうして、私たちの夏は終りました。私は、大きく手を振りながら、自分のいじめ虫に、もう一度さようならを言いました。

さようなら、さようなら、いじめ虫…………」END.

●お問い合わせ・お申し込みは



株式会社 教 配

104 東京都中央区銀座6-6-7(朝日ビル)

電話 (03)3571-9351(代) FAX (03)3574-1376

関西支社 〒550 大阪市西区西本町1丁目13番38号(西本町新興ビル) ☎(06) 536-4693

九州支社 〒810 福岡市中央区谷1丁目1番8号(メゾンダイレイン907号) ☎(092)752-3725